

しば

大里晃代

「気配」という語をうまく使っている。クリスマスの曲が街に流れ、ホワイト・クリスマスのイメージを共有する人が多ければその分、気配の濃度が増すのだ。

絶筆の最後のことば「デタラメダ！」隣の文字に弱く寄り掛かる
佐藤博之

岸上大作自殺寸前の遺書の字に取材した作。下句、実物を見ての感想で、説得力がある。姫路文学館の没後五〇年を記念しての展示である。私は大学歌人会で何度か同席したが、岸上と実際に会ったことがある者も少なくなってきた。

黒板係など誰もせぬクラスあり消して授業し消して
婦りぬ
松元雅子

高校だろうか。中学かも知れない。普通は黒板係の生徒がいて、授業が終わると教師が書いた字を消すのだろう。下句の繰り返しが面白く採っておいた。大学で授業していた私などは、自分で消して帰るのが当たり前だと思っていたが。

長時間かけて挑んだ漸化式こじれてどっとストレス
が来る
五十嵐毅

数学をうたう八首の中の作。大学受験で難問の「漸化式」である。他の作ともども数学の専門用語の、言葉としてのひびきの面白さを生かしている点が、見どころ。

掬い上げる形とも捧げる形ともルーシー・リーの青
き器は
塚本瑞江

陶器の形の表現の工夫に注目。ルーシー・リーはウィーン出身の陶芸家。回顧展が日本各地の何カ所かで開催された。

スクワット百回できるといふ人を百回まではテレビ
映さず
辻尾修

日常の中の当たり前の出来事をあえてうたう歌の面白さ。やや既視感があるのは残念だが。

ほろほろと萩の花散る意識野に轍をひいてストレッ
チャーの音
鈴木香代子

他の作品から見て、自分の入院・手術の体験に取材した作らしい。この一首のイメージは、萩の花が散る野を車輪が通過するのを見ているときに、ストレッチャーの音が聞こえたというのだ。自身が意識朦朧としながらストレッチャーに乗せられている場面に取材したかと思うが、抽象化がうまくいっている。

五十年を生きしコンサートホールには五十年分の溜
息のあり
鈴木勉

今年五十周年を迎えた上野の東京文化会館をうたっているらしい。作者自身の思い出の数々やホールに対する愛着も読める。